

[原著論文]

## 医療ソーシャルワーカーを描いたテレビドラマ における職業像の研究

田中 秀和

キーワード：ソーシャルワーカー像，テレビドラマ，フィクション

### A Study of TV Drama Describing Social Workers in Hospitals

Hidekazu Tanaka

#### Abstract

An imaginary television drama describing the life of a typical social worker was broadcast in Japan in 2006. The purpose of this study was to evaluate the program by analyzing positive and negative factors from different viewpoints. For example, in the positive evaluation we became aware of the existence of social workers among patients, and the amount of knowledge required to do their jobs well. In the negative evaluation we noticed that the way social workers are trained in Japan is not fully explicit. In addition, a lack of proper terminology among TV viewers may cause misunderstanding about this profession.

Keywords : Image of social worker, TV drama, Fiction

#### 要旨

看護師を主人公として創作されたスペシャルドラマ「Ns'あおい」(2006年)の放送分について、ソーシャルワーカーが登場する場面に焦点をあて、そこで描かれているソーシャルワーカーの職業像をソーシャルワークの専門的視点から検討した。ドラマ内では、ソーシャルワーカーの存在が公にされ、その職務を遂行していくためには、ある程度の医学的知識が必要であることを明らかにしていた。しかし、ソーシャルワーカーの養成教育課程が明らかにされておらず、その職務内容に関して、誤解を招くようなセリフがあり、適切さに欠ける点もみられた。

#### I はじめに

社会には、様々な職業が存在している。人々はそれらの中から、自身の希望、適性・能力、社会経済状況などを加味しそれぞれの職業に就くことになる。社会に存在する職業は無数にあるが、人々はそれらの存在をすべて知るわけではない。

今日、キャリア教育が推進され、職業に就く前段階にある児童・生徒・学生等に対しては、社会に存在する職業を紹介するメディアも数多く現れるようになった。しかし社会経験を積む前段階にある子どもたちは、職業威信の高い職業(医師・学者等)やメディアの中で頻繁に取り上げられる職業(ミュージシャン・タレント等)、さらには自身の発達の中で、接する職業(保育士・学校の

---

[連絡先] 田中 秀和 学校法人 国際総合学園 国際こども・福祉カレッジ  
〒951-8164 新潟県新潟市中央区関屋昭和町 2-84-201  
TEL : 025-378-5176  
E-mail: tanaka.hidekazu@nsg.gr.jp

教師等) に対して憧れを抱きやすい。それは、上記のように人々は社会に存在する職をすべて把握できるわけではなく、自身により身近な職を希望・選択しやすいものと考えられる。子どもたちにとって、身近な職は不完全ながらもそれらの職業像をイメージすることが可能であり、それは当該職に将来就こうとするものを確保することにもつながる。

横山はソーシャルワークの専門的視点から、新しい対人援助専門職の職業イメージが社会の中で認識される重要性に関し、その理由を2点に集約して述べている<sup>1)</sup>。まず、当該専門職が社会に存在する事実を一般市民が認知することは、市民自身が専門的援助を必要とする事態に陥った際に、その専門職の援助を利用・活用する可能性を広める働きをもつ。さらに、対人援助専門職の職業像が社会の中で認知されることは、将来、その専門職に就くことを志望するティーンエイジャーが目標とする職業群の中に、当該職種に関する情報が加えられ、それは将来、当該職業に就く者の確保にもつながる。

ソーシャルワーク分野における専門職は、1987(昭和62)年に社会福祉士及び介護福祉士法により国家資格化された。その後、紆余曲折を経て精神保健福祉士法が制定されたのが1997(平成9)年である。制度開始から時間を経て、2007(平成19)年に社会福祉士及び介護福祉士法が改正され、社会福祉士養成カリキュラムは、より時代や利用者のニーズに合致した形を目指して大幅に変更された。さらに、2012(平成24)年度からは、精神保健福祉士養成カリキュラムも変更された。

このようにソーシャルワーク専門職は、国家資格が成立してから20年以上の歳月を経過しているが、他の対人援助専門職と比較すると、この職業に対する世間一般の認知度はかなり低いものと推測される。確かに、この間にもこの職業を紹介する出版物は「社会福祉士になるために」などのタイトルで発行されていた。また、今日においては、小説や漫画の題材として、ソーシャルワーク専門職が取り上げられることも多くなってきている<sup>註1)</sup>。

しかしソーシャルワーク専門職は、「見えざる専門職」と揶揄されることもあるほど、他の対人援助専門職に比べて、イメージすることが困難な職業である。

また、ソーシャルワーク専門職の職業像に関する先行研究は稀である。この分野の先行研究としてまず挙げられるのは、ソーシャルワーカーがテレビドラマの主人公として登場した映像作品として1992(平成4)年に放送された「天使のように生きてみたい」に対し、横山が、ソーシャルワークの専門的視点から検討を加えているものがある<sup>2)</sup>。さらに同氏は、ソーシャルワーカーが取り上げられた漫画・小説に対してソーシャルワーカー像を検討している<sup>3)</sup>。一方、田中は2005(平成17)年にNHK

教育テレビで放送された「あしたをつかめ 平成若者仕事図鑑」の放送分について、医療ソーシャルワーカーの職業像を検討している<sup>4)</sup>。これらの研究は、ソーシャルワーク専門職の職業像をメディアがどのように取り上げているのかに対して検討しており、今後も研究の深化が望まれる分野である。

このような状況の中で、看護師を主人公としたテレビドラマにおいて、ソーシャルワーカーが登場する作品がある。本稿では、ソーシャルワーカーを描いたフィクション作品の中で、ソーシャルワーカーの職業像がどのように表現されているかを検討する。

## II 研究対象と方法

研究対象である下記のテレビ番組について、当該番組が後日DVD化され市販されているものを視聴し、映像と音声によって表現されているソーシャルワーカーの職業像をソーシャルワークの専門的視点から検討した。ソーシャルワーカーの職業像を明らかにすることは、上記のように一般市民のニーズの掘り起こしや、当該職業を目指す者の確保のほかに、その専門性を確立するうえで一助になると考えられる。当該職業の専門性が確立されることは、ソーシャルワーカーの社会的地位を向上させるとともに、その職業を他者に対して説明することを容易にする働きをもたらす。このことは、当該職業を目指す学生に対して行われる社会福祉専門教育をより充実させる結果を導くと考えられる。さらには、ソーシャルワーカーと共に働く医師、看護師やコメディカルスタッフ等が、ソーシャルワーカーの仕事内容を理解することを助け、今日求められているチーム医療の促進に役立つものと考えられる。このように、ソーシャルワーカーの職業像を明らかにすることは有意義な作業であり、それがメディアの中でどのように取り上げられているかを考察することで、その現状と今後の課題点を探ることを目的とする。

### <研究対象>

フジテレビ系列のスペシャルドラマ「Ns'あおい」(2006年1月～3月 連続ドラマにて放映された作品のスペシャル版)

放送日時:

2006(平成18)年9月26日(火) 21:00～23:18

原作:こしのりょう

あらすじ:主人公は、看護師。連続ドラマでは、様々な経験を経て、成長していく主人公の姿が描かれていた。本放送において主人公はプリセプターとして新人看護師を指導する立場になっている。また、新たな登場人物としてアメリカで働いていた医師と、海外でソーシャ

ルワークを学んできたという人物が登場し、様々な困難に立ち向かっていく姿を描いていた。

### Ⅲ 倫理的配慮

本研究は、ソーシャルワーカーが映像作品の中でどのように描かれているかに注目しているものである。本稿にて取り上げる映像作品は、看護師を主人公としソーシャルワーカーを中心に描いたものではない。また、当作品はソーシャルワーカーの職業像を明確にするために作成された訳ではない。したがって、問題点を指摘する場合においても、対象作品の娯乐的側面に対して評価や批評を行っているものではない。そのため、原作者や作品の出演者の意図に必ずしも沿わない可能性があることをあらかじめ述べておく。

### Ⅳ 結果

#### 1 肯定的に評価される点

1) ソーシャルワーカーという職種が存在することを公にしている

番組のなかでは、病院の「新しい医療スタイルへの改革」により、海外でソーシャルワークを学んできたという人物が登場し、医療福祉相談室に配属されている。連続ドラマで本番組が放送された際には、ソーシャルワーカーと名乗る人物は登場していないが、このスペシャル放送においてはごく自然にソーシャルワーカーという用語が医師や看護師からも飛び出している。上記のように、職業像を描くことに対し困難が伴うソーシャルワーカーという存在を全国放送にて視聴者に伝えた意義は大きい。番組内では、ソーシャルワーカーが母子世帯の親子と面談を行っている場面や、入院患者の妻が入所していた特別養護老人ホームと思われる施設へ訪問する場面もあり、その職業像を映像にて表現していた。

また、この放送は、午後9時台の放送であり、一般家庭においても比較的視聴しやすい時間帯に放映された上、キャストとして石原さとみ、柳場敏郎、杉田かおるなどの比較的知名度の高い俳優を起用している。看護師を主人公としたドラマであるが、保健・医療・福祉分野においては、異職種によるチーム医療や連携・協働がこれまで以上に重視されている今日、その一員としてソーシャルワーカーが登場したことは評価できる事柄である。

2) ソーシャルワーカーにも、ある程度の医学知識が必要とされていることが明らかにされている

本放送において、ソーシャルワーカーが初登場する場面において、その周囲にいた人物が急患となり、その場にいた主人公の看護師が処置を行う場面がある。その

際、ソーシャルワーカーは、アナフィラキシーショックについての説明をその場にいた看護助手に対して行っている。

ソーシャルワーカーは、「人間と環境の接点に介入」(IFSW〈国際ソーシャルワーカー連盟〉による定義)することや「社会関係の主體的側面に働きかけること」(岡村重夫)などを求められる職種である。そのため、社会制度や政策、国の動向などについて常に最新の知識を身につけることが求められる。しかし、クライアントを理解するには、医学知識も必要不可欠であることは間違いない。保健・医療・福祉分野の専門職がそれぞれの専門性を構築していくことは、その負の側面として、それぞれの領域について棲み分けを促進することにも繋がりにくい。連携や協働は異職種への理解と知識があって初めて成立する可能性をもつものである。

このような背景の中で、ソーシャルワーカーが急患のクライアントの病状についてある程度の医学知識があることが明らかにされた意義は大きいと言える。このドラマの中でソーシャルワーカーは、「ある程度病気の知識がないと患者さんの相談に乗れないだろう」との発言もあり、ソーシャルワーカーとして働く上で、基礎的な医学知識が必要不可欠であることが描かれている。

社会福祉士養成課程においては、従来から「医学一般」(新カリキュラムにおいては、人体の構造と機能及び疾病)の科目はあったが、2007(平成19)年の社会福祉士及び介護福祉士法の改正により、「医師その他の保健医療サービスを提供する者その他の関係者との連絡及び調整」が社会福祉士の定義として追加されている。さらに、「保健医療サービス」が新カリキュラムに導入されている今日、ソーシャルワーカーが医学知識をもつ重要性は益々増加しているといえるであろう。

#### 2 否定的に評価される点

1) ソーシャルワーカーの養成教育課程が明らかにされていない

ドラマの中に登場するソーシャルワーカーは、海外でソーシャルワークを学んできたとの情報があるものの、どの国でどのようなソーシャルワークに関する専門教育を受けてきたのかについては不明である。また、ソーシャルワーカーの国家資格である社会福祉士に関する関しても一切触れられていない。日本と海外では、ソーシャルワーカーの養成課程や社会的地位も大きな差がある。例えばアメリカにおいては、「ソーシャルワーカーの資格認定はCSWE(ソーシャルワーク教育協議会)が認定した大学・大学院の卒業生を対象として各州が行い、特に開業するソーシャルワーカーにはNASW(全米ソーシャルワーカー協会)の会員資格を認められ入会し

た者であることが不可欠」となっている<sup>5)</sup>。そのため、アメリカではソーシャルワーカーの資格は各州によって異なったものとなっている<sup>6)</sup>。また、日本では、社会福祉教育に対して、文部科学省と厚生労働省という2省の基準が設けられているが、アメリカにおいては専門団体によるアクレディテーションが行われている<sup>7)</sup>。

このように、日米の比較を例にしてもソーシャルワーカーの資格制度は大きな違いが存在している。これまでのソーシャルワーカーに関する職業像に関する先行研究は、ソーシャルワーカーの養成教育課程について正確な情報を視聴者に提供する必要性を述べているが、本作品においてはそれが明らかにされておらず、視聴者は、どのような養成教育を受けることでソーシャルワーカーになることができるのかを知ることができない。日本においてはソーシャルワーカーの社会的認知度が低く、近年においては毎年、海の日を「ソーシャルワーカーデー」として啓発活動を行いその打開を図っている。横須賀はこのような取り組みに対し、医師が「医師の日」を設けるとは考えられず、その背景には「社会的認知度が低いからこそ、それを打開するためには、このような普及活動を行わざるをえない」と述べている<sup>8)</sup>。また、日本においてはソーシャルワーカーの専門職団体がそれぞれの分野に分かれており、「社会福祉専門職団体協議会」を組織し連携を図っているものの、その社会的認知度の向上や地位向上に向けて団結して行動することには困難が伴う。秋山は、「ソーシャルワーカー団体が四つに分かれていることこそが、わが国のソーシャルワーク、社会福祉の発展に影を落としているとはいえないであろうか。」と述べているが<sup>9)</sup>、この点に関しては筆者も共感を覚える。

本作品において、ソーシャルワーカーが海外で勉強してきたことが描かれたことは日本と海外との比較を行う上でも新しい風を吹き込んだと言えるが、その養成教育課程を正確に伝えることは、上記の通り、将来、ソーシャルワーカーとなる人材を確保する点においても重要なことと言えるであろう<sup>註2)</sup>。

## 2) 日本のソーシャルワーカーに対してその専門性が全く確立されていないような誤解を招くようなセリフがある

ドラマの中で、ソーシャルワーカーが日本と海外のソーシャルワーカーを比較して発言する場面がある。その内容は以下の通りである。

(看護師の国際比較に関する発言後に) ソーシャルワーカーもそう。かっこよく横文字使って呼んだって、結局日本じゃ転院の手配をしたり、申請書を書くだけの

事務係に過ぎないだろう。海外のソーシャルワーカーは、法律関係の修士号を取ったりして幅広い問題に対処できるように常に自分を高めてる。確かに患者と向き合う時間は短いかもしれないけど、それがひいては患者のためになるんだ。違うか？

この発言の前後にソーシャルワーカーは、医師や看護師の日米比較も行っている。そこでは、日本の医療従事者は自己犠牲が美学であるとの認識をもっているとするソーシャルワーカー自身の考え方が披露され、このような考え方を多くの日本人が持っているがゆえに、看護師の社会的地位が低いままであることを、主人公の看護師に向かって発言している。ドラマでは、このソーシャルワーカーの発言によって、看護師や看護助手から反感を買うことになってしまう。もちろん、ソーシャルワーカーが自身の考えを他職種に対して発言することは保障されるべきことであり、その点は否定されるものではないものの、ドラマではこの発言によって、ソーシャルワーカーと他職種との間に溝ができてしまっている。

海外でソーシャルワークを学んできたソーシャルワーカーは、日本の医療現場におけるソーシャルワーカーの業務実態に不満を感じていると思われる。ここでのソーシャルワーカーの発言は、「転院の手配」「申請書を書く」という事務的な業務に追われていて、ソーシャルワーカーが本来果たすべき役割を十分担えていないと認識している。また、ここでソーシャルワーカーは、海外ではソーシャルワーカーは大学院で法律を学んだりして幅広い問題に対処できるように自己研鑽に励んでおり、それが患者へのよい支援につながると考えている。

この発言は、日本のソーシャルワーカーが置かれている状況を部分的には正確に表現しているものと思われる。確かに、日本のソーシャルワーカーには社会福祉士や精神保健福祉士という国家資格が存在するが、それは名称独占に過ぎず、今日においても地域包括支援センターを除いて社会福祉士の必置機関はない。また、病院は、チーム医療や職種間での連携・協働が叫ばれているものの、実質的には医師を頂点としたピラミッド型の組織である。その中でソーシャルワーカーの地位は低いものと言わざるとえない。ここでの発言と同様の内容が、医療ソーシャルワーカーを描いた漫画作品においてもある。そこでは、医療ソーシャルワーカーは医療行為を行うことができず、いてもいなくてもよいただの「なんでも屋」であるとされている<sup>10)</sup>。

上記のような点があることは、否定できない事実である。しかし、一般視聴者向けに製作された作品の中におけるこのような発言は、ソーシャルワーカーという職業の魅力伝えることには繋がらず、その専門性が全く確

立されていないような印象を与えてしまう可能性を否定することはできない。これらの点に関し、岸はその著書の中で、「医療機関では医師を頂点としたピラミッド形の力関係が根強く残っており、これも職種を超えた意見交換や協力をしにくくする要因になっている」と述べている。また、岸は同著書のなかで病院によっては、ソーシャルワーカーの存在が他職種に理解されていないところもあることを明らかにしており、このようなことから、その職業像を確立することは、急務であるといえる<sup>11)</sup>。さらに、大谷はその著書のなかで、「病院という組織のなかでは、やはり『医師』がトップである」と述べ、新人のときから医療の最終責任を担う医師と、社会福祉専門職であるソーシャルワーカーには上下関係があることを明らかにしている<sup>12)</sup>。これらの指摘は、職種間の連携や協働が謳われている今日においても、その実現が容易ではないことを示しているといえよう。横山は、フィクション作品におけるソーシャルワーカーの先行研究の中で、「特にフィクション作品の場合は、より多様な一般視聴者・読者に届き、理解者を大幅に増やす可能性がある反面、専門職の普及啓発や教育を目的としてつくられている専門書や教材とは異なり、エンターテインメントとして成立させるために実像を過度に誇張させた脚色や演出が施され、専門性や職業像への誤解を招く可能性もはらんでいる。」と述べているが<sup>13)</sup>、本稿で取り上げているテレビドラマにおいてもそのような面があることは否定できない。

ソーシャルワークの専門性に関する議論は、これまでも盛んに行われてきており、1915年にアブラハム・フレックスナーによって、ソーシャルワークの専門性が否定されて以来、様々な研究者がその確立に努めてきた<sup>14)</sup>。このような中現実には、上記のセリフが出ることは否定できないが、それが全く確立されていないような印象を与える発言は決して望ましいとはいえない。

さらに、ここでの発言はソーシャルワーカー個人の努力のみが患者へのよい支援につながるものとの誤解を生みかねない。ソーシャルワーカーの多くは、病院という組織内で働いており、よりよい職場環境や職域拡大を目指したソーシャルアクション等の視点をもつことは不可欠である。個人の努力は、もちろん必要であるものの、それだけではソーシャルワーカーが抱えている問題の根本的な解決策につながらないことを認識する必要がある。ソーシャルアクションは、ソーシャルワーカーがもつ専門的な技術のひとつであり、ここでの発言は、ソーシャルワーカーが社会に対して働きかける役割を忘れており、否定的に評価される点といえるであろう。

## V 考察

今回取り上げたようなフィクション作品において、ソーシャルワーカーの職業像が取り上げられることは、基本的には望ましいことである。それは、ソーシャルワーカーが社会的認知度を上げ、その社会的地位を高めるための一助になるであろう。しかし、それはよい事柄ばかりではなく、内容によっては大きな誤解を招く恐れもある。上記の横山は、「フィクションという前提ではあっても、実生活の中で接する機会の多い医師・看護師等と比べて、一般的な認知度が低いソーシャルワーカーの場合は、現実と誇張との区別や紙数の都合によって説明の省略されている部分などが一般読者には、より判別しにくいだけに注意深い表現が望まれる」と述べている<sup>15)</sup>。この指摘は、専門職の成立要件のひとつとされる、職業の伝達可能性を高める必要性につながる。ソーシャルワークの実践者や研究者は、このようなフィクション作品に対する協力・監修をより積極的に引き受け、その職業像と魅力を伝えていくことが望まれる。

## 文献

- 1) 横山豊治：ソーシャルワーカーを描いたフィクション作品に関する一考察—医療ソーシャルワーカーを描いたテレビドラマの事例検討—, 新潟医療福祉学会誌 3 (2): pp89-98, 2003.
- 2) 横山豊治：前掲1).
- 3) 横山豊治：フィクション作品におけるソーシャルワーカー像の検討—MSWを主人公に描いた4作品を通して—, 医療ソーシャルワーク研究 1 (1): pp24-36, 2011.
- 4) 田中秀和：医療ソーシャルワーカーを描いたノンフィクション番組に関する一考察, 新潟医療福祉学会誌 8 (2): pp30-34, 2008.
- 5) 山手茂, 横山豊治：日・米の社会福祉専門職生涯教育に関する比較研究, 新潟医療福祉学会誌 1 (1): pp24-42, 2001.
- 6) 岩崎浩三：ソーシャルワーカーの継続教育の現状と課題, ソーシャルワーカー 8: pp61-79, 2004.
- 7) 山手茂：社会福祉教育の日米比較—日米の共通点と相違点, 新潟医療福祉学会誌 3 (2): pp10-19, 2003.
- 8) 横須賀俊司：障害者にとってソーシャルワーカーは必要か—「専門職」の限界と自己改革, 松岡克尚・横須賀俊司編 障害者ソーシャルワークへのアプローチ—その構築と実践におけるジレンマ, 明石書店, 東京, pp25-54, 2011.
- 9) 秋山智久：社会福祉専門職の研究, ミネルヴァ書

- 房. 京都. p278, 2007.
- 10) くじらいいく子：いとしのタンバリン. 小学館. 東京. p19, 2011.
  - 11) 岸伸江：他部署・他機関との連携, 荒川義子編 医療ソーシャルワーカーの仕事. 川島書店. 東京. pp113-136, 2000.
  - 12) 大谷京子：病院ってどんなところ?, 荒川義子編 医療ソーシャルワーカーの仕事. 川島書店. 東京. p5, 2000.
  - 13) 横山豊治：前掲3).
  - 14) 三島亜紀子：社会福祉学の＜科学性＞—ソーシャルワーカーは専門職か?. 勁草書房. 東京. pp1-25, 2007.
  - 15) 横山豊治：前掲3).

#### 註

- 1) 近年において医療ソーシャルワーカーを取り上げたフィクション作品として以下のようなものがある。  
山田宗樹：人は永遠に輝く星にはなれない. 小学館. 東京. 2008.  
さくらいもとこ：MSW相談室、ナツミです。角川書店. 2008.

くじらいいく子：いとしのタンバリン. 小学館. 2011.

また、児童相談所の児童福祉司を主人公とした漫画作品に、以下のものがある。

夾竹桃ジン：ちいさいひと—青葉児童相談所物語. 小学館. 2011.

- 2) この点に関し、本稿では否定的に評価される点として考察を行った。これまで行われてきた先行研究においても、養成教育課程をメディアの中で提示する必要性が訴えられてきた。しかし見方を変えれば、養成教育の課程がメディアにおいて曖昧に提示されたがゆえに、それを見て当該職業に関心をもった者が自分自身で、養成教育課程を調べる可能性は否定できず、そのような場合は、肯定的に評価される点として取り上げる必要がある。

しかし養成教育課程がはっきりと提示されることは、その職業像や専門性の確立の一助になると考えられ、それが曖昧であることは当該職業の職業像を確立する上で不利益になるものと筆者は考える。このことは、これまでの先行研究でも認められてきた点である。